

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02605

研究課題名(和文) 譲歩からの意味拡張に関する記述的、理論的研究

研究課題名(英文) A descriptive and theoretical study of semantic extension from concession

研究代表者

大橋 浩 (Ohashi, Hiroshi)

九州大学・基幹教育院・教授

研究者番号：40169040

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：譲歩の意味を表す語句や構文からの意味変化について、新たな意味を拡張するプロセスやその動機づけをコーパスからの用例を分析することにより明らかにし、意味変化理論におけるその意味合いについて考察した。

事例研究として取り上げたhaving said thatとその関連構文は継起的意味から譲歩構文としての意味を定着させているが、さらにトピックシフトを合図する談話標識的用法を持つことが明らかになった。この談話的機能の発達は、譲歩節+主節という譲歩構文の特徴に動機づけがあり、また、スコープを文から談話へ拡大するという点でanywayなどの譲歩表現と軌を一にするものであることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The process and motivation of the semantic change from constructions with concessive meaning were revealed through the investigation of examples from corpora and the implications of the development on the theory of semantic change was considered. The English "having said that" construction and its related constructions were examined as case studies. These constructions have now entrenched concessive meaning but also developed a function of a discourse marker that marks topic shift. The development of this discourse management function is argued to be motivated by their constructional composition with the concessive clause followed by the main clause. In addition, scope expansion from the sentence to discourse is found to be in parallel with the expansion observed with topic-resuming "anyway" and parenthetical hedge clauses that have developed from concessive meaning.

研究分野：認知言語学

キーワード：意味変化 譲歩 文法化 主観化 間主観化 文法化 構文化 談話標識

1. 研究開始当初の背景

語用論や認知言語学など従来共時的現象を対象とした言語理論の考え方や分析を通時的現象に適用することにより言語変化研究は1980年代以降急速な発展をとげてきた。「譲歩」の領域でも、他の意味から譲歩への変化については König (1985)、Hilpert (2013) などの研究が行われてきた。一方で、譲歩からの意味発達についてはあまり注目を集めなかったように思われる。しかし、「譲歩」は意味変化の一方方向性と意味変化の談話的基盤という二つの重要な仮説に極めて強い関連があるばかりでなく、これらの仮説の妥当性を検証する上で非常に有効な試金石となると考えられる。

(1) Elizabeth C. Traugott は、意味変化には、客観的意味>主観的意味>間主観的意味という1方向性があることを実証的に示してきた。譲歩文の多くは、聞き手の発言や想定を受け入れた上でそれに対立する主張を行い聞き手の考えを修正しようとするという意味で、強い間主観性を帯びている。間主観的表現からの意味発達が1方向性の仮説とどのように関わるかは意味変化の理論的研究として重要な意義を持つ。

(2) Traugott 等は、意味変化を語用論的推意が意味化するプロセスであると考えており、意味変化の基盤が話し手と聞き手による会話にあると考えている。譲歩文は聞き手の発言や態度に誘発されて使用される点に強い談話的基盤を持つが、譲歩構文が新しい意味を発達させる際にどのような言語使用に関わる要因が働いているかを明らかにすることで意味変化の語用論的・談話的要因の一端を解明することが期待される。

以上のように、譲歩からの意味変化については体系的な記述的、理論的研究が行われておらず、その研究によって意味変化理論への貢献が期待されるという背景があった。

2. 研究の目的

(1) 譲歩の意味を持つ語句や構文で、新たな用法や意味を拡張させている例について、先行研究とコーパスの用例を調査する。

(2) 新たな意味を発達させた語句や構文について、その拡張プロセスをコーパスからのデータを分析することにより実証的に解明し、その拡張がどのように動機付けられているかを考察する。

(3) 新たな意味が Traugott 等たちの意味変化の一方方向の仮説とどのような関係にあるのかを考察する。

3. 研究の方法

(1) 「譲歩」への意味変化に関する文献を調査し、譲歩の意味を持つ語や句や構文における譲歩の意味の発達プロセスを整理する。

(2) 「譲歩」から新たな用法や意味を拡張している語、句、構文を探し、その新たな用法や意味を特定する。資料としては主に

Corpus of Contemporary American English (COCA) などの共時的コーパスを利用する。

(3) 新たな用法や意味拡張のプロセスを共時的コーパスからのデータで推定し、Corpus of Historical American English (COHA), The Corpus of Late Modern English Texts (CLMET) などの通時的コーパスからのデータによって検証する。

(4) 新たな用法や意味の発達と、譲歩文の構文的特徴との関係を考察する。

(5) 新たな用法や意味が発達を意味変化理論の観点から考察する。

4. 研究成果

以下、「3. 研究の方法」の項目(1)~(5)に対応した成果を述べる。

(1) 譲歩への変化については次のような分類が提案されている。

(1) i. universal quantifiers, free-choice quantifiers, and actual, emphatic particles: *although, albeit, for all, all the same, however, anyway*

ii. conditional or temporal and/or additive focus particle and emphatic, factual particle: *even though, even so*

iii. remarkable co-occurrence or co-existence of two facts: *nevertheless, nonetheless, just the same, regardless, still, yet*

iv. 'obstinacy, spite, contempt' i.e., notions originally only applicable to human agents or experiencers: *in spite of, despite* (König (1985))

(2) i. ... expressions that acknowledge the existence of an adverse situation: *admitting, granting*

ii. ... expressions that contain the universal quantifier *all*: *albeit, although, for all*

iii. ... expressions that express the human emotions of spite, contempt, or defiance: *regardless, in spite of*

iv. ... expressions whose lexical meaning is identity or sameness: *all the same, just the same*

v. ... expressions that denote the concomitance of two events and thereby affirm the factuality of the second event: *nevertheless, nonetheless, notwithstanding, still, yet*

(Hilpert (2013))

本研究で対象とした英語の *all you want* は (1i)(2ii)に分類される。*all you want* は(3)のような「必要なものすべて」という名詞句から「好きなだけ」という強意副詞の意味を発達させている。興味深いことに後者の意味ではまず、(4)のように聞き手への許可を表す文で使われていたのが、(5a)のように聞き手への反感や(5b)のように譲歩を表す文で使われる用法を発達させている。

(3) "Is that *all you want*?" she asked with a swift smile.

(4) a. "May I take a copy?" Delaney repeated. "Take *all you want*," ...

b. Have *all you want*. That's good stuff.

(5) a. ... You just go ahead and kid me all you want.

b. MARIE-PAULE : ... I'm going away from here. Far away. I'm changing my life.

ODILON: Change your life all you want, but leave mine alone! Understand?

興味深いのは、「許可する」、「認める」という意味から、受け入れたことの有効性を否定する内容を付加することで明示的な譲歩の用法が発達・定着したと考えられ、その意味では(2i)の面も含んでいることである。all you want の all は許可の意味では聞き手の利益を最大限にする効果を持ち、譲歩の意味では「聞き手が何をしても無駄だ」という強調の効果を上げる役割を担っているといえる。

一方、現代英語で「とは言え」という意味をほぼ定着させている having said that も、そもそも(6)のように、having said this という形で「そう言って」という継起的意味で使われていたことが CLMET や COHA の用例の調査から明らかになった。

(6) *Having said this, shee wrote as hereafter followeth.* (Brinton (2017))

時を表す表現の譲歩化は(1ii)(2v)に分類される、比較的多くの語や構文に見られる変化であり、本研究では十分に扱えなかったが日本語の「～ながら」「～したところで」もこの例であると考えられる。

(2) 事例研究として英語の having said that とその関連構文である that said, that being said, having said this, this said, this being said とその強調形である having said all that などについてコーパスの用例を詳細に分析した。その結果次のことが明らかになった。

①現代英語においてはいずれの構文も、(7)のように、先行する自分の発話を受けて、何らかの点でそれに対立、あるいは、矛盾する内容の主張を主節で行うという意味で、譲歩構文として用いられる。

(7) *I sometimes get worried in this job. Having said that, I enjoy doing it, it's a challenge.*

②having said that 節＋主節という節順が圧倒的に高い。COCA では約 99%がこの節順である。

③いずれの構文でも、以下の COCA からの用例のように、主節が話題を転換する、トピックシフトとして談話管理的な機能を果たしている例が見られる。

(8) *Having said that, let me just stop you.*

(9) *Well, that said, you know, I'd like to address that.*

(10) *That being said, let us end our sparring.*

いずれも話し手自身の先行発話ではなく聞き手の発言を受けて、話題を終えることや、変えることを提案している。これらの例では having said that などに譲歩の意味は希薄であり、even so などの譲歩表現で置き換えると不自然になる。むしろ、後続する主節で話題の転換を提案することをあらかじめ合図するトピックシフトマーカという談話標識的

な役割を果たしていると考えられる。(11)のように主節がなく、単独で用いられる例の存在はその機能を裏付けるものと考えることができよう。

(11) *All right. Having said that. And I think we have got some agreement, gentlemen. (...)*

(3) CLMET や COHA の用例の調査により、having said that 構文はまず「～と言って」という継起的な意味を表し、事態の客観的な描写に用いられていたことが明らかになった。COHA では継起的用法の初出が 1850 年代であるのに対して譲歩用法の初出は 1950 年代であり、その後次第に定着し、1990 年代と 2000 年代に出現数が増加していることが分かった。

また、興味深いことに非常に初期の例では継起的用法として that ではなく this 構文が使われていた (Brinton (2017) も参照)。this が話し手の「なわ張り」内の情報を指すのに対し、that は話し手の「なわ張り」外の情報を指す (神尾 (1990)) ことを考えると、譲歩文では、指示される話し手自身の先行発話とは対立する主張を主節で行うことから、発話時には先行発話内容はすでに話し手のなわ張り外にあることを示唆するものと思われる。

(4) トピックシフト用法の発達は譲歩文の構文的特徴に動機づけられていると考えられる。コーパスの実例を観察すると、(7)のように、話し手自身の先行発話と正反対のことを主張する典型的な譲歩の例はむしろ少数であり、先行発話と主節の内容の対立の度合いは様々である。その中には(12)に示すように、それまでの内容と関係してはいるがやや異なる方向にトピックをずらしていく機能を主節が果たしている例が多く見られる。

(12) *I loathe the emphasis on competition.*

Having said that, who is going to win the Oscar? ここでは「アカデミー賞の獲得レースの熾烈さ」から「候補者の予想」へとトピックをシフトさせている。

この用法の発達は、having said that 構文で主節が文末におかれるという構文的特徴と密接に結びついている。文末は文の焦点を担うと同時に、後続談話との結びつきが強くなる傾向がある。談話を話者が望む方向へと舵を切る機能を主節に担わせるのに非常に適した位置であるといえる。トピックシフトの意味の拡張は逆接を表す接続詞 but にも見られる。

(13) a. *But now to the main question.*

b. *But, Your Honor, are we limited on the size of the award?* (松尾他編 (2015))

対立を表す表現一般に同様の派生が見られるかについては今後の大変興味深い課題である。

(5) 譲歩からトピックシフトへの変化は、客観的>主観的>間主観的という方向性とは異なる次元の問題として捉えるべきであろう。譲歩の用法では、主節は having said that の that が指す先行発話と対立する内容を主張

することが第一義的な役割であり、当該の文をそのスコープとしていた。一方、トピックシフトとしての用法では、先行発話との対立関係は漂白化され、後続談話の方向性を提示することが主な職能となっており、その意味で、スコープは当該の文というよりも、それを越えて後続談話を含んでいると考えられる。それに伴い、*having that said* は主節でトピックシフトが行われることを合図する談話標識的談表現へと変化していると考えられる。この意味で、譲歩からトピックシフトへの変化は、文内から談話へスコープの拡大と捉えることが適切であろう。

これと軌を一にする論考として、Tabor and Traugott(1995)は *anyway* が(14a)のような譲歩の意味から、(14b)のようなトピックを再開する合図をする談話標識的用法を発達させていることを指摘している。

(14) a. ... but he sold it *anyway* and it was implanted in a patient.

b. So uhm - *anyway* just think about this offer.

(Tabor and Traugott (1995))

また、Hilpert(2013)は、(15)のように、譲歩的挿入節が、主節内容に対立する考えを提示することにより、断定を弱めるヘッジの卓割を果たしているとして述べている。

(15) a. Power, *although important*, is not everything.

b. *Though small*, the collection is considered the best of its kind.

c. The year 1960 in Canada, *if disappointing*, was not all that bad.

d. This defensive strategy, *while clever*, wasn't necessary.

これらの研究を含めて、譲歩から談話への発達がどのように動機づけられているかについては他の言語における用例などを含め、今後継続して研究を進めていく上での課題となる。

また、近年注目を集めている周辺部研究(小野寺(2017)など)の観点からも *having said that* 構文は興味深い観点を提供する。一般に左周辺部(Left Periphery)の要素は談話標識化しやすく、他方右周辺部(Right Periphery)に位置する要素は後続談話の予測を行う機能を持つ傾向があるといわれるが、*having said that* のトピックシフトマーカー化、主節のトピックシフト機能の発達は、2つの周辺部が持つ特徴と一致するからである。今後の研究方略として「周辺部」という視点からの分析も興味深い。

<引用文献>

- Brinton, Laurel J. 2017. *The Evolution of Pragmatic Markers in English: Pathways of Change*, Cambridge University Press.
- Hilpert, Martin. 2013. *Constructional Change in English: Developments in Allomorphy, Word Formation, and Syntax*, Cambridge

University Press, Cambridge.

神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』大修館.

König, E. 1985. "On the history of concessive connectives in English: Diachronic and synchronic evidence," *Lingua* 66, 1-19.

松尾文子、廣瀬浩三、西川真由美. 2015. 『英語談話標識用法辞典』開拓社.

小野寺典子編. 2017. 『発話のはじめと終わり一語用論的調節のなされる場所』ひつじ書房.

Tabor, Whitney and Elizabeth Closs Traugott.

1998. "Structural scope expansion and grammaticalization," *The Limits of Grammaticalization*, ed. by Anna Giacalone Ramat and Paul J. Hopper, John Benjamins, 229-272.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

① 大橋 浩、「譲歩構文と拡張」、『日本英文学会支部大会統合 Proceedings』、査読無、2017、333-334.

② 大橋 浩、「認知的アプローチと文法化：英語の強意副詞を例に」、「シンポジウム報告 自然言語の歴史的变化と文法化 - 日英仏語の事例研究と数理的アプローチの批判的検討を通じて- 』『フランス語学研究』第51号、日本フランス語学会、査読無、2017、116-120.

③ Ohashi, Hiroshi, Review of *Constructionalization and Constructional Changes* by Elizabeth Closs Traugott and Graeme Trousdale(2013), *English Linguistics* 33.2, 査読有、2016、604-615.

④ 大橋 浩、「3. Having said that: コーパスを利用した用法基盤による分析」、「シンポジウム」コーパスからの認知言語学へのアプローチ、長加奈子、大谷直輝、川瀬義清と共著、『英語コーパス研究』、英語コーパス学会、第23号、査読有、2016、61-78.

⑤ 大橋 浩、「譲歩への変化と譲歩からの変化」、『日本認知言語学会論文集』第15巻、査読有、2015、18-30.

[学会発表] (計9件)

① 大橋 浩、「譲歩から談話標識へ：周辺部の観点から」、「シンポジウム『「歴史語用論」と「発話のはじめと終わり(周辺部)」に見られるダイナミズム』、第7回動的語用論研究会、2018年3月25日、京都工芸繊維大学.

② 大橋 浩、「認知言語学から見た文法化」、「日本英文学会北海道支部第62回大会セミナー」、2017年10月28日、北海学園大学.

③ Ohashi, Hiroshi, "From Concession to Topic Shift: The Case of *Having Said That*," The 15th International Pragmatics Conference, 2017, July 18, Belfast Waterfront, Belfast, UK.

④ Ohashi, Hiroshi, "Concessive Constructions and the Development of Discourse Management Function," The Meiji International Symposium

2017: New Directions in Pragmatic Research, Synchronic and Diachronic Perspectives, 2017 March 20, Meiji University.

⑤ 大橋 浩、「譲歩への変化」、『日本英文学会九州支部第 69 回大会シンポジウム 構文研究とコーパス』司会・講師、中村学園大学、2016 年 10 月 22 日。

⑥ 大橋 浩、「譲歩からの変化」、「シンポジウム 認知言語学の内と外から言語変化を捉え直す」成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究」招待講演、2016 年 8 月 12 日、成蹊大学。

⑦ 大橋 浩、「認知的アプローチと文法化：英語の強意副詞を例に」、「シンポジウム 自然言語の歴史的変化と文法化 - 日英仏語の事例研究と数理的アプローチの批判的検討を通して-」招待講演、日本フランス語学会 2016 年度シンポジウム、2016 年 5 月 28 日、学習院大学。

⑧ 大橋 浩、「*Having said that*: コーパスを利用した用法基盤による分析」、『英語コーパス学会 第 41 回大会シンポジウム コーパスからの認知言語学へのアプローチ』、2015 年 10 月 3 日、愛知大学名古屋キャンパス。

⑨ 大橋 浩、「認知言語学と言語変化-コーパスを利用して」、『認知言語学フォーラム 2015』招待講演、北海道大学、2015 年 7 月 4 日。

[図書] (計 3 件)

① 大橋 浩、「第 6 章 文法化はなぜ認知言語学の問題になるのだろうか?」、『認知言語学とは何か』高橋英光、森雄一、野村益寛編、くろしお出版 (vi+245p)、2018、113-131。

② 大橋 浩、「That Said について」、『ことばのパーспекティブ』、中村芳久教授退職記念論文集刊行会編、開拓社 (xxii+528p)、2018、319-330。

③ 大橋 浩、「譲歩からの変化」、『認知言語学の内と外から言語変化を捉え直す』、森雄一、西村義樹、長谷川明香編、くろしお出版、(2018 年出版予定)。

[その他]

ホームページ等

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K005333/research.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大橋 浩 (OHASHI, Hiroshi)

九州大学・基幹教育院・教授

研究者番号：40169040

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし